

良き母親とは何か—親準備性の研究のまとめに代えて—

岩田 崇(慶応大小児科)

深谷和子(東京学芸大児童学)

「はじめに」

われわれは、本研究班に於いて、良き母子相互作用をもたらす土壌としての「親準備性」の概念を追及し、これに調査的接近をはかろうとして来た。これまでに、大学生、高校生における結婚観、対異性行動等に関する研究、女性専門職および一般主婦の育児行動、専業主婦の育児不安等、子供の成長に必要な親としての「準備性」の周辺を探る試みがなされて来た。

母子相互作用研究の最終年度に当たり、これ迄のまとめとして「良き母親(母性)」とは何かを探る試みを企てた。「良き母親」の本質やそれを育てる条件が明らかになれば、母子保健上の方向性を示唆する資料の一つとなるであろう。

「調査票の構成」

1. まず、「親」(特に母親)たる条件を充たしているかどうかの評価は、「子供を十分に育てることができるかどうか」で行われるべきであろう。すなわち「十分な心身の健康状態」(人格形成も含めて)を作り出すことのできる母親が「良き親、十分な親」と操作的に定義されてよいと思われる。

2. 母親行動や母性に関する先行研究やわれわれの本研究班での研究成果を総合して考えると、良き母親の構成要素は次のようなものと考えられる。

- ① 他人に対する共感能力の発達
(他人の感情や状態に対する感受性、子供好き等)
- ② 人格の安定性、もしくは低不安レベル
(育児不安の低いことを含む)
- ③ 育児を自己実現の一部として取り込む能力

(自己犠牲、子供へのサービスを苦痛と考えない、もしくは育児以外の自己実現の目当てを持っており、断念していない)

- ④ 自己受容の能力の発達、自己価値観の確立
(人格の安定性に関わる条件として)
- ⑤ 幸福な子供時代の体験
(父母に愛されて育った経験、または育児技術のノウハウの体験)
- ⑥ 育児やしつけの技術
(適切な教育観、人間観等の人生哲学も含む)

以上を今回の調査に当たって構成概念として設定し、これらをふまえて、調査票が作成され、これらの内容と育児上の成功との関わりが追及された。

【対象】

関東の12の保育園と2つの病院の小児科外来を利用する母親、計678サンプル。年齢30才~39才が全体の76%。¹⁾ 歴構成は四年制大学卒が25%で一般よりかなり高学歴。またフルタイム勤務者が52%、パートタイマー21%と、働く母親が4分の3を占める。

【調査時期】

昭和60年12月

【結果】

1. 子育てはうまく行っているか

まあまあと評価する母親が7割前後。健康面では期待以上だが、性格面であまりうまく行っていない、と考える者が多い、しつけ面では、両方に分れる傾向がある。(表1)

2. 自分をどんな母親としてとらえているか。

「子どもが好きでない」母親は16%に過ぎず、

性格特性についてはかなり肯定的(暖かく、安定して、優しくetc)で、母親ぶりを自己採点すれば、平均以上が22%、人並み位が37%、やや劣るが22%、かなり劣るが20%。また表2に示したように、自分の母親と自分とを比較させると、自分は昔の母親より教育熱心だが、「家事の熱心さ」「子どもへの献身」「優しさ」の点では劣ると考えている者が多い。(表は一部省略)

3. 母親の心理的態度的属性をめぐって

1) 育児不安について

昨年引きつづき、働く母親たちの育児不安傾向を見てみると、どの項目にも3~5割の者たちが不安傾向を示す反応のしかたをしている。(表省略)

2) 働くことへの罪償感について

仕事を持つ母親たちの間には、完全な育児ができないための不安や子どもへの罪償感がつきものと言われるが、表3に示したように、それを「いつも、わりと」思っている者は全体の4分の1。過度な罪償感、過保護などの望ましくない育児を生み出すと考えられるので、この者たちには何らかのケアやチェックが必要である。

また表4は、母親たちが自己実現をどの位達成している、またはしつつあると考えているかを見たものである。育児を自己実現の一部ととらえられるか、それとも阻止する条件ととらえるかは、子どもへの感情や態度に反映するともされる。働く母親がサンプルのため、「現在もけっこうやりたいことはやっている」者が28%であり、子育てのため「断念した」者は12%に過ぎない。

さらに表5は「自己受容」すなわち、自分に対してポジティブな感情を抱けるか、セルフエスチーム(self-esteem)の一側面をみようとしたものである。臨床心理学ではこれを、適応性の指標の一つと考える。すなわち表5に示したように、自分を好きかどうか、たとえ「大好き」とまでは言えないまでも、せめて「いくつかの欠

点はあるが、まあまあ自分だと思う」ぐらいには自己肯定、自己受容ができないと、不適応行動を生み易くなる。ネガティブな自己受容を示す者は、表が示すように、全体の4分の1に達する。

また表6に掲げたように、自己受容度と他者への受容度を比べると、よい方から「母親一夫一父親一自分」の順位がみられる。わずかの差だが、母親に対する感情は、あらゆる他者の中で最もポジティブなものかもしれない。

4. よき母親を生み出す条件は何か

以上いくつかの母親のもつ属性を見て来たが、これらのうち、よき育児を生み出すのに最大の貢献をもたらす因子は、「自己受容の度」すなわちセルフエスチームではないかと推定される。表5の自己受容の割合に従ってネガティブな自己受容者25%、ポジティブな自己受容者16%、その中間群59%とに3分して、それぞれのグループのデータを見てゆくと、表7から表11までのように、すべてに有意な数字がえられている。

①自己受容のよいグループほど、育児不安が低い傾向にある。(表7)

②自己受容のよいグループほど、性格・健康・しつけ・能力のすべての面で、子どもに満足している(育児上の成功をおさめている)。(表8)

③自己受容のよいグループほど、トータルな母親としての自己評価が高い。(表9)

④自己受容のよいグループほど、子ども好きである。(表10)

⑤自己受容のわるいグループほど、働く母親である自分が、子どもにふびんな思いをさせているとの感情を抱いている。

⑥こうした結果が示すように、よき母親を生み出す重要な条件の1つは、自分を受容できるかどうか、すなわち自分に基本的に好意を抱けるかどうかであると考えられる。その理由の1つは、表12が示すように、自分を好きな者は、母親・夫・父親のいずれに対しても好意的な評価をしている点であろう。すなわちこの特性は、

単に自分に対する感情を示す指標に止まらず、人間一般に対する暖い感情(ポジティブな人間観)を反映するものと考えられる。

[結論]

以上のように「親準備性」とは、それぞれの母親の中に、十分な自己受容、すなわち自分に対する肯定的な感情を準備させることで、はじめて可能となると考えられる。自分を含めて人間一般に対する暖い感情が、少なくとも本サンプルのような、乳幼児を育てている時期の母親には、よい母親を生み出すのに重要な要件となると考えられる。そうした感情をそれぞれの母親

の中に育てるには、どのような生育歴や教育、人間関係が必要かなど、母親たちの幼少期にさかのぼってアプローチすることが必要と思われる。

以上、6年間にわたって継続して来た「親準備性」研究のまとめとしてわれわれは、青年にとって母親たることの準備状態とは、自分を含めた人間一般への好意的感情を育ててゆくことにあることを指摘して、まとめに代えることとする。(また父親については更に別の角度からのアプローチが必要であろう。)

表1 育児の成功

お子さん(この用紙を持ち帰られた)は、現在までのところほど思いどおりに育てられますか。

	期待以上 である	まあまあ である	少し うまく行って いない 全 く思いど おりでない
1) 性格の面で	6.7	73.1	20.2
2) 健康の面で	22.8	64.0	13.3
3) しつけの面で	21.1	66.3	31.6
4) 能力(才能・頭のよさなど)の面で	9.5	75.1	15.4

表2 昔の母親と比べて

あなたの現在の母親ぶりをご自分のお母さまと比べてどうですか。

	ご自分の方が 優れている	同じ くらい	ご自分の方が 劣っている
① 教育に関する熱心さ	41.4	45.5	13.1
② 子どもに対するしつけ	30.4	44.5	25.1
③ 家事の熱心さ	18.1	33.1	48.8
④ やさしさ	17.5	54.3	28.3
⑤ 子どもへの献身や自己犠牲	17.8	37.8	44.5

表3 子への罪償感

お仕事をもちのお母さんにかかっています。
 あなたは、ご自分が仕事をもっているために、子どもに母親らしいことをしてやれていないとふびんにお思いになることがありますか。

いつも思っている	わりと思っている	時どき思う	あまり思わない	ぜんぜん思わない
1	2	3	4	5
9.8	15.1	49.9	21.0	4.2
24.9			25.2	

表4 自己実現

あなたは、仕事や趣味などでやりたいことがあったけれども、今は子育てのために、それを中断またはあきらめてしまっているようなことがありますか。(1つえらんでください)

1. いくつかあったが、子育ての方が大事だと思ひあきらめた	11.9
2. とりあえず今は、中断している(いつか再開するつもり)	45.4
3. これといって特にやりたいことはなかった	14.5
4. けっこう現在もやりたいことはやっている。	28.2
	42.7

表5 自己受容 (self esteem)

あなたは、ご自分がお好きですか。それともあまり好きとは思えない方ですか。

1) 欠点だらけで、とても気に入らない(好きでない)自分	4.7
2) いくつかの欠点が気になって、あまり好きな自分ではない	20.6
3) いくつか欠点はあるが、まあまあ自分だと思う	58.6
4) 欠点はあるが、全体としてはかなり自分に満足している(好きである)	14.8
5) 自分で自分を大好きである	1.2

表6

受容度の比較

	自分	主人	母親	父親
1) 欠点だらけで気に入らない	4.7	1.1	0.5	2.0
2) あまり、好きなほうではない	20.6	6.4	6.0	11.3
3) まあまあ	58.6	37.9	35.2	42.3
4) 全体としては、かなり好きな	14.8	41.9	33.1	27.4
5) とても大好きな	1.2	12.8	25.2	17.2

表7 自己受容との関連—育児不安の有無—

あなたは、日頃次のように思うことがおありですか。

	しょっちゅう ある	ときどき ある	あまり ない	ほとんど ない	
	1	2	3	4	
1) 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることもある	わらい ↓ よい 自己受容	17.5 41 3.8	52.4 49.2 36.2	30.1 48.7 60.0	↓
2) 子どもがわずらわしくてイライラしてしまふ		7.2 1.8 4.8	49.4 42.5 32.4	43.0 55.7 62.9	↓
5) 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う		7.3 3.4 5.7	40.6 34.4 22.9	52.1 62.3 71.6	↓
3) (自分は子どもをうまく育てていると思う)		3.0 3.7 10.5	28.7 51.2 55.2	68.3 45.1 34.3	↑
4) (育児によって自分が成長していると感じられる)		13.4 30.1 46.2	59.1 55.6 46.2	27.4 14.3 7.7	↑

$P < .001$

表8 自己受容との関連—育児の成功—

お子さん(この用紙を持ち帰られた)は、現在までのところほど思いどおりに育てられますか。

	期待以上 である	まあまあ である	少し うまく行って いない + とうりでない		
1) 性格の面で	わらい ↓ よい 自己受容	4.8 5.4 14.4	67.3 75.9 73.2	27.9 18.7 12.3	↑
2) 健康の面で		15.5 23.3 33.0	64.9 65.0 55.7	19.6 11.2 11.4	↑
3) しつけの面で		2.0 0.6 7.2	58.5 69.8 66.0	39.5 29.6 26.8	↑
4) 能力(才能・頭のよさなど)の面で		8.8 7.9 16.5	68.2 78.2 75.3	23.0 13.9 8.3	↑

$P < .001$

表9 自己受容との関連—母親ぶりの評価—

ふつうのお母さんを70点とすれば、あなたはお子さんにとって、何点ぐらいのお母さんだと思われますか。

	100点～80	70	60	50～
わるい	10.4	22.1	27.6	39.9
↓	19.8	43.3	22.4	14.5
よい	45.7	35.1	12.6	6.8
自己受容				

$P < .001$

表10 自己受容との関連—子ども好きか—

あなたは子ども好き(ご自分のお子さん以外の子ども一般について)な方ですか。それともあまり好きな方ではありませんか。

	とても子ども好き 1	わりと子ども好き 2	ふつう 3	あまり好きでない 4	ぜんぜん好きでない 5
わるい	35.3		39.5	25.1	
↓	50.0		37.6	12.4	
よい	55.7		28.3	16.0	
自己受容					

$P < .001$

表11 自己受容との関連—罪償感の有無—

あなたは、ご自分が仕事をもっているために、子どもに母親らしいことをしてやれていないとふびんにお思いになることがありますか。

	いつも思っている 1	わりと思っている 2	時どき思う 3	あまり思わない 4	ぜんぜん思わない 5
わるい	33.6		51.1	15.3	
↓	22.2		51.5	26.3	
よい	20.9		42.9	36.3	
自己受容					

$P < .001$

表12 自己受容との関連—夫、両親への好意—

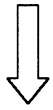
	よい受容		
	夫	母親	父親
わるい	45.0	47.3	34.4
(自分) ↓	54.8	60.6	46.4
よい	73.0	76.9	54.7
自己受容			

$P < .001$



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



「はじめに」

われわれは、本研究班に於いて、良き母子相互作用をもたらす土壌としての「親準備性」の概念を追及し、これに調査的接近をはかろうとして来た。これまでに、大学生、高校生における結婚観、対異性行動等に関する研究、女性専門職および一般主婦の育児行動、専業主婦の育児不安等、子供の成長に必要な親としての「準備性」の周辺を探る試みがなされて来た。

母子相互作用研究の最終年度に当たり、これ迄のまとめとして「良き母親(母性)」とは何かを探る試みを企てた。「良き母親」の本質やそれを育てる条件が明らかになれば、母子保健上の方向性を示唆する資料の一つとなるであろう。